

# 二人小町

芥川龍之介

青空文庫



おのの小町、几帳の陰に草紙を讀んでいる。そこへ突然黄泉の使が現れる。黄泉の使は色の黒い若者。しかも耳は兎の耳である。

小町（驚きながら）誰です、あなたは？

使 黄泉の使です。

小町 黄泉の使！ ではもうわたしは死ぬのですか？ もうこの世にはいられないのですか？ まあ、少し待つて下さい。わたしはまだ二十一です。まだ美しい盛りなのです。

どうか命は助けて下さい。

使 いけません。わたしは一天万乗の君でも容赦しない使なのです。

小町 あなたは情を知らないのですか？ わたしが今死んで御覽なさい。深草の少将はどうするでしょう？ わたしは少将と約束しました。天に在っては比翼の鳥、地に在っては連理の枝、——ああ、あの約束を思うだけでも、わたしの胸は張り裂けるようです。少将はわたしの死んだことを聞けば、きつと歎き死に死んでしまうでしょう。

使 (つまらなそうに) 歎き死が出来れば仕合せです。とにかく一度は恋されたのですから、……しかしそんなことはどうでもよろしい。さあ地獄へお伴ともしましょう。

小町 いけません。いけません。あなたはまだ知らないのですか？ わたしはただの体ではありません。もう少将の胤たねを宿しているのです。わたしが今死ぬとすれば、子供も、

——可愛いわたしの子供も一しよに死ななければなりません。(泣きながら) あなたはそれでも好いと云うのですか？ 闇やみから闇へ子供をやつても、かまわないと云うのですか？

使 (ひるみながら) それはお子さんにはお気の毒です。しかし閻魔王えんまおうの命令ですから、どうか一しよに来て下さい。何、地獄も考えるほど、悪いところではありません。昔から名高い美人や才子はたいがい地獄へ行っています。

小町 あなたは鬼おにです。羅刹らせつです。わたしが死ねば少将も死にます。少将の胤たねの子供も死にます。三人ともみんな死んでしまいます。いえ、そればかりではありません。年とつたわたしの父や母もきつと一しよに死んでしまいます。(一層泣き声を立てながら) わたしは黄泉よみの使でも、もう少し優しいと思っていました。

使 (迷惑めいわくそうに) わたしはお助け申したいのですが、……

小町 (生き返ったように顔を上げながら) ではどうか助けて下さい。五年でも十年で

もかまいません。どうかわたしの 寿 命じゆみやうを延ばして下さい。たった五年、たった十年、——子供さえ成人すれば好よいのです。それでもいけないと云うのですか？

使 さあ、年限はかまわないのですが、——しかしあなたをつれて行かなければ代りが一人入るのです。あなたと同じ年頃の、……

小町 （興こう奮ふんしながら）では誰でもつれて行つて下さい。わたしの 召めし使つかいの女の中にも、同じ年の女は二三人います。阿あ漕こでも小こ松まつでもかまいません。あなたの気に入つたのをつれて行つて下さい。

使 いや、名前もあなたのように小町と云わなければいけないのです。

小町 小町！ 誰か小町と云う人はいなかったかしら。ああ、います。います。（発ほつ音おん）  
作てき的に笑わらい出でしながら）玉たま造つくりの小こ町まちと云う人がいます。あの人を代りにつれて行つて下さい。

使 年もあなたと同じくらいですか？

小町 ええ、ちょうど同じくらいです。ただ綺きれ麗いではありませんが、——器きり量りやうなどは  
どうでもかまわないのでしょうか？

使 （愛あい想そよく）悪わるい方が好よいのです。同情どうじやうしずにすみませから。

小町 (生き生きと) ではあの人に行つて貰つて下さい。あの方はこの世にいるよりも地獄に住みたいと云つています。誰も逢う人がいないものですから。

使 よろしい。その人をつれて行きましょう。ではお子さんを大事にして下さい。(と得く) 々と) 黄泉の使も情だけは心得ているつもりなのです。

使、突然また消え失せる。

小町 ああ、やつと助かつた! これも日頃信心する神や仏のお計らいであろう。(手を合せる) 八百万の神々、十方の諸菩薩、どうかこの嘘の剥げませぬように。

## 二

黄泉の使、玉造の小町を背負いながら、闇穴道を歩いて来る。

小町 (金切声を出しながら) どこへ行くのです? どこへ行くのです?

使 地獄へ行くのです。

小町 地獄へ! そんなはずはありません。現に昨日安倍の晴明も寿命は八十六と云つていました。

使 それは陰陽師の嘘でしょう。

小町 いいえ、嘘ではありません。安倍の清明の云うことは何でもちやんと当るのです。あなたこそ嘘をついているのでしよう。そら、返事に困っているではありませんか？

使 (独白) どうもおれは正直すぎるようだ。

小町 まだ強情を張るつもりなのか？ さあ、正直に白状しておしまいな

さい。

使 実はあなたにはお気の毒ですが、……

小町 そんなことだろうと思っていました。「お気の毒ですが、」どうしたのです？

使 あなたは小野の小町の代りに地獄へ堕ちることになったのです。

小町 小野の小町の代りに！ それはまた一体どうしたんです？

使 あの人は今身持ちだそうです。深草の少将の胤とかを、……

小町 (憤然と) それをほんとうだと思ったのですか？ 嘘ですよ。あなた！ 少将

は今でもあの人のところへ百夜通いをしているくらいですもの。少将の胤を宿すのはおろか、逢ったことさえ一度もありはしません。嘘も、嘘も、真赤な嘘ですよ！

使 真赤な嘘？ そんなことはまさかないでしょう。

小町 では誰にでも聞いて御覽なさい。深草の少将の百夜通いと云えば、下司の子供でも知っているはずですよ。それをあなたは嘘とも思わずに、……あの人の代りにわたしの命を、……ひどい。ひどい。ひどい。（泣き始める）

使 泣いてはいけません。泣くことは何もありませんよ。（背中から玉造の小町を下す）  
あなたは始終この世よりも、地獄に住みたがっていたでしょう。して見ればわたしの欺されたのは、反って仕合せではありませんか？

小町 （嘸みつきそうに）誰がそんなことを云ったのです？

使 （怯ず怯ず）やっぱりさつき小野の小町が、……

小町 まあ、何と云う凶々しい人だ！ 嘘つき！ 九尾の狐！ 男たらし！ 騙り

！ 尼天狗！ おひきずり！ もうもうもう、今度顔を合せたが最後、きつと喉笛に

嘸みついてやるから。口惜しい。口惜しい。口惜しい。（黄泉の使をこづきまわす）

使 まあ、待つて下さい。わたしは何も知らなかつたのですから、——まあ、この手をゆるめて下さい。

小町 一体あなたが莫迦ではありませんか？ そんな嘘を真に受けるとは、……

使 しかし誰でも真に受けますよ。……あなたは何か小野の小町に恨まれることでもあ



るのですか？

小町 （妙に微笑する）あるような、ないような、……まあ、あるのかも知れません。

使 するとその恨まれることと云うのは？

小町 （軽蔑するように）お互たがいに女ではありませんか？

使 なるほど、美しい同士でしたっけ。

小町 あら、お世辞せじなどはおよしなさい。

使 お世辞ではありませんよ。ほんとうに美しいと思っているのです。いや、口には云われないくらい美しいと思っっているのです。

小町 まあ、あんな嬉しがらせばっかり！ あなたこそ黄泉には似合わない、美しいかたではありませんか？

使 こんな色の黒い男がですか？

小町 黒い方が立派りっぱですよ。男らしい気がしますもの。

使 しかしこの耳は気味が悪いでしょう。

小町 あら、可愛いではありませんか？ ちよいとわたしに触さわらして下さい。わたしは兎うさぎが大好きなのですから。（使の兎の耳を玩おもちゃ弄やにする）もつとこつちへいらっしやい。

何だかわたしはあなたのためなら、死んでも好いような気がしますよ。

使 (小町を抱きながら) ほんとうですか？

小町 (半ば眼を閉じたまま) ほんとうならば？

使 こうするのです。(接吻しようとする)

小町 (突きのける) いけません。

使 では、……では嘘なのですか？

小町 いいえ、嘘ではありません。ただあなたが本気かどうか、それさえわかれば好いのです。

使 では何でも云いつけて下さい。あなたの欲しいものは何ですか？ 火鼠の裘です

か、蓬菜の玉の枝ですか、それとも燕の子安貝ですか？

小町 まあ、お待ちなさい。わたしのお願はこれだけです。——どうかわたしを生かして下さい。その代りに小野の小町を、——あの憎らしい小野の小町を、わたしの代りにつれて行って下さい。

使 そんなことだけで好いのですか？ よろしい。あなたの云う通りにします。

小町 きつとですね？ まあ、嬉しい。きつとならば、……(使を引き寄せる)

使 ああ、わたしこそ死んでしまいそうです。

## 三

大勢おおぜいの神将しんしょう、あるいは戟ほこを執とり、あるいは劍けんを提ひげ、小野おのの小町こまちの屋根やまねを護まもつて  
いる。そこへ黄泉よみの使つかい、蹠そつ跟ごんと空へ現れる。

神将 誰だ、貴様は？

使 わたしは黄泉の使です。どうかそこを通して下さい。

神将 通すことはならぬ。

使 わたしは小町をつれに来たのです。

神将 小町を渡すことはなおさらならぬ。

使 なおさらならぬ？ あなたがたは一体何もののです？

神将 我々は天あめが下したの陰陽師おんみょうじ、安倍あべの晴明せいめいの加持かじにより、小町を守護する三十番神さんじゅうばんじんじゃ。

使 三十番神！ あなたがたはあの嘘つきを、——あの男たらしを守護するのですか？

神将 黙れ！ か弱い女をいじめるばかりか、悪名あくみょうを着せるとは怪けしからぬやつじや。

使 何が悪名です？ 小町はほんとうに、嘘つきの男たらしではありませんか？

神将 まだ云うな。よしよし、云うならば云つて見ろ。その耳を二つとも削そいでしまふぞ。

使 しかし小町は現にわたしを……

神将 (憤然ふんぜんと) この戟ほこを食らつて往生おうじょうしろ！ (使に飛びかかる)

使 助けてくれえ！ (消え失せる)

## 四

数十年後ご、老いたる女乞食こじき二人、枯かれ芒すすきの原に話している。一人は小野の小町、他の一人は玉造たまづくりの小町。

小野の小町 苦しい日ばかり続きますね。

玉造の小町 こんな苦しい思いをするより、死んだ方がましかも知れません。

小野の小町 (独り語のように) あの時に死ねば好かつたのです。黄泉の使に会った時に……

玉造の小町 おや、あなたもお会いになつたのですか？

小野の小町 (疑深そうに) あなたもと仰有るのは？ あなたこそお会いになつたのですか？

玉造の小町 (冷やかに) いいえ、わたしは会いません。

小野の小町 わたしの会つたのも唐の使です。

しばらくの間沈黙。黄泉の使、忙しそうに通るかか。

玉造の小町 」

小野の小町 「黄泉の使！ 黄泉の使！

黄泉の使 誰です、わたしを呼びとめたのは？

玉造の小町 (小野の小町に) あなたは黄泉の使を御存知ではありませんか？

小野の小町 (玉造の小町に) あなたも知らないとおっしゃれますまい。(黄泉の使に) このかたは玉造の小町です。あなたはとうに御存知でしょう。

玉造の小町 このかたは小野の小町です。やっぱりあなたのお馴染みでしょう。

使 何、玉造の小町に小野の小町！ あなたがたが、——骨と皮ばかりの女乞食が！

小野の小町 どうせ骨と皮ばかりの女乞食ですよ。

玉造の小町 わたしに抱きついたのを忘れたのですか？

使 まあ、そう腹を立てずに下さい。あんまり変っていたものですから、つい口をすべらせたのです。……時にわたしを呼びとめたのは、何か用でもあるのですか？

小野の小町 ありますとも。ありますとも。どうか黄泉へつれて行って下さい。

玉造の小町 わたしも一しよにつれて行って下さい。

使 黄泉へつれて行け？ 冗談じょうだんを云つてはいけません。またわたしを欺だますのでしよう。

玉造の小町 あら、欺しなどするものですか！

小野の小町 ほんとうにどうかつれて行って下さい。

使 あなたがたを！ (首を振りながら) どうもわたしには受け合われません。またひどい目に会うのは嫌いやですから、誰かほかのものにお頼たのみなさい。

小野の小町 どうかわたしを憐あわれんで下さい。あなたも情なさけは知っているはずです。

玉造の小町 そんなことを云わずに、つれて行って下さい。きっとあなたの妻になりま

すから。

使 駄目だめです。駄目です。あなたがたにかかり合うと——いや、あなたがたばかりではない、女と云うやつにかかり合うと、どんな目に会うかわかりません。あなたがたは虎とらよりも強い。内心にやしゃ如夜叉たとえの譬通りです。第一あなたがたの涙の前には、誰でも意気いけ地じがなくなってしまう。(小野の小町に)あなたの涙などは凄すこいものですよ。

小野の小町 嘘です。嘘です。あなたはわたしの涙などに動かされたことはありません。使 (耳にもかけずに) 第二にあなたがたは肌身はだみさえ任まかせば、どんなことでも出来ないことはない。(玉造の小町に) あなたはその手を使ったのです。

玉造の小町 卑いやしいことを云うのはおよしなさい。あなたこそ恋を知らないのです。

使 (やはり無頓着むとんじやくに) 第三に、——これが一番恐ろしいのですが、第三に世の中は神代かみよ以来、すっかり女に欺だまされている。女と云えば弱いもの、優しいものと思ひこんでいる。ひどい目に会わずのはいつも男、会わされるのはいつも女、——そうよりほかに考さえない。その癖ほんとうは女のために、始しじゆう終ゆう男が悩まされている。(小野の小町に) 三さん十番じゅうばん神じんを御覧ごらんなさい。わたしばかり悪わるくものにしていたでしょう。

小野の小町 神かみ 仏ほとけの悪わるく口くちはおよしなさい。

使 いや、わたしには神仏よりも、もつとあなたがたが恐ろしいのです。あなたがたは男の心も体も、自由自在に弄ぶもてあそことが出来る。その上万一手に余れば、世の中の加勢かせいも借りることが出来る。このくらい強いものはありますまい。またほんとうにあなたがたは日本国中至るところに、あなたがたの餌食えじきになった男の屍骸しがいをまき散らしています。わたしはまず何よりも先へ、あなたがたの爪にかからないように、用心しなければなりません。

小野の小町 (玉造の小町に) まあ、何と云う人聞きの悪い、手前勝手な理窟りくつでしょう。

玉造の小町 (小野の小町に) ほんとうに男のわがままには呆れ返あきってしまいます。

(黄泉よみの使に) 女こそ男の餌食えじきです。いいえ、あなたが何と云つても、男の餌食に違いありません。昔も男の餌食でした。今も男の餌食です。将来も男の、……

使 (急に晴れ晴れと) 将来は男に有望です。女の太政大臣だいにしやうだいじん、女の檢非違使けびいし、女の

閻魔王えんまおう、女の三十番神、——そういうものが出来るとすれば、男は少し助かるでしょう。第一に女は男狩りのほかに、仕栄しばえのある仕事が出来ますから。第二に女の世の中は今の男の世の中ほど、女に甘いはずはありませんから。

小野の小町 あなたはそんなにわたしを憎にくいと思つて居るのですか？

玉造の小町 お憎みなさい。お憎みなさい。思い切つてお憎みなさい。



使（憂鬱ゆううつに）ところが憎み切れないのです。もし憎み切れるとすれば、もっと仕合せになつてゐるでしょう。（突然また凱歌がいかを挙げるように）しかし今は大丈夫です。あなたがたは昔のあなたがたではない。骨と皮ばかりの女乞食です。あなたがたの爪にはかかりません。

玉造の小町 ええ、もうどこへでも行つてしまえ！

小野の小町 まあ、そんなことを云わずに、……これ、この通り拝みますから。

使 いけません。ではさようなら。（枯かれすすき芒ぼうの中に消える）

小野の小町 どうしまししょう？

玉造の小町 どうしまししょう？

二人ともそこへ泣き伏してしまふ。

（大正十二年二月）



## 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年1月10日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 二人小町

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>